

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

つれづれ
インタビュー
マンガびと

20

オカヤイツミ



オカヤイツミ・プロフィール

1978年東京都生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒。食と睡眠をこよなく愛するイラストレーターでマンガ家。著作は「いるちがい」「すきまめし」(マグガーデン)、「おあとがよろしいようで」(文藝春秋)、「いのまま」(芳文社)、「みつば通り商店街にて」「ものするひと」(KADOKAWA) など。

「オカヤイツミさんというマンガ家をインタビューしてほしい」と編集長からメールが届いたのが今年(2019年)の3月。てっきりこれまでの「新つれづれ草」でインタビューしてきたマンガ家さんと同じ世代の人だと思い込んでいた。が、ネットで検索してみたら1978年生まれというから現在40歳。若い。そして著作の「ものするひと」「おあとがよろしいようで」「みつば通り商店街にて」「いのまま」などを読む。どれも淡々とした日常をじっくりと追う作風に魅せられ、インタビューのためだということも忘れて読む。このようなマンガを描く人はどのような人なのだろう。そんな素朴な疑問からインタビューは始まった。

★★★★★

オカヤさんは、これまで「新つれづれ草」のインタビューで登場したマンガ家さんたちとは二世代ほど若いマンガ家さんだ。手塚治虫や横山光輝、石ノ

森章太郎といった巨匠に影響を受けた世代の人たちとはまるで違うのではないかと話を向けてみると、意外な答えが返ってきた。

うちの親は子供がマンガを読むことは好まなかったんですが、なぜか白土三平さんの「カムイ伝」だけはあったんですよ。それで読んで「なんだこれ」と衝撃を受けたことを覚えています。それが幼稚園ぐらいの頃。人が死ぬ残酷描写もいっぱいあるし、読んではいけないものかもしれないと思いつつながら読んでいたという。あと8つ離れた兄がいて、彼が持っていたマンガをこっそり読んでいましたね。江口寿史さんの「ストップ！ひばりくん」とか、魔夜峰央さんの「パタリロ！」とか。兄がとり・みきさんの大ファンだったので、たくさん読みました。とりさんのマンガは引用とかメタファーが多くて意味がわからなかったんですけど、それでも面白く読んでい

た記憶があります。

「カムイ伝」を読んでいた少女は、小学校に上がり、いわゆる少女マンガも読み始めるが、自分でマンガを描くようなことはなかったという。

まわりの子たちが少女マンガを読み始めていたので、私も友だちから借りて読みました。「りぼん」

がいちばん流行っていた頃で、池野恋さんの「ときめきトゥナイト」とか、柘あおいさんの「星の瞳のシエルエット」とか。ただ、私はわりとぼーつとした子供

だったので、恋愛物とかにあまりピンと来ていなかったんですね。まわりの子はみんなきやあきやあ言っているのに(笑)。絵を描くのは好きでしたけど、マンガの絵を真似して描いたことはあんまりなかったかな。読んではいただ多かれ少なかれマンガの影響は受けていると思いますけど。

聞くところによると、オカヤさんの家族にはいわゆる会社員と



呼べる人は誰もいなかったという。一緒に住んでいた母方の祖父は絵の先生で、母親は美大を出ており、父親はテレビドラマの監督だったと話す。

父はフリーのディレクターで、「はぐれ刑事純情派」とか、藤田まことさんのドラマをよく撮っていました。子供だったのでフリーの意味がわからなかったんですけど、そういえば私が幼稚園のときに父がよくお迎えに来ていたんですね。あとから「あのときは仕事がなかったんだよ」と言われて。自分もいまフリーですから、そのときの父の状況がよくわかります。いつ休みが取れるかわからないので、あまり家族旅行にも行きませんでしたね。父はドラマのロケで各地の温泉に行っていたりしていたので、いいなあつて。でも父の仕事場を見に行ったことはなくて、何をしているかよくわかっていませんでした。



美大に進みサブカルに浸かる日々
自分の描く絵には
コンプレックスがあった

そうした家庭で育ったオカヤさん。高校を出て美大に入ることになるのだが、特に親から進路のことは何も言われなかったという。

美大に来る人つて、親を説得して来るパターンが多いんです。頭の固い親だと美大に行きたいといつても「潰しがきかない」と許してもらえませんから。でもうちは「好きにしなさい」という感じでした。ふわふわしたことをするのに躊躇がないというか。私の場合、絵は好きでしたし、商業デザインのように、一般の人の目に触れるものに憧れていたのもありました。その方が食べていけるという計算もちよつとはあつて。ですからグラフィックデザイン科に入

学したんです。

オカヤさんが美大に入学したのは1998年。フリッパーズ・ギターやピチカート・ファイヴといった渋谷系と言われる音楽が流行った時期でもあり、映画はミニシアターが花盛りだった。オカヤさんもそうしたサブカルなものに浸かった日々だったと話す。

サブカル系のマンガをよく読みましたね。これは高校のときからですけど「アフタヌーン」とか「コミックビーム」が好きでした。「COMIC CUE」などのサブカル系の漫画誌がたくさん出ていた時代ですね。まんだらけで高野文子さんの「絶対安全剃刀」を買って読んだり。あと岡崎京子さんや魚喃キリコさんがすごく好きでした。特に岡崎さんのラフできちんとトーン貼ってないみたいなのところがす

ごくカッコいいなと思っていました。ただそのときも模写したりすることはありませんでした。私、ほんとにいわゆるマンガを描く勉強とか修行はしたことがないんです。

絵が好きで、その流れで美大に通ったオカヤさんだが、自分の描く絵にはコンプレックスがあったと話す。

美大に行くと、全国からその高校でいちばん絵の上手い子が来ているわけで、それこそマンガが上手な人もいっぱいいました。それに比べたら、私なんか全然上手くないなあと。でも大人になって、好き勝手に描いて、これで大丈夫だったんだと。そう思うようになってからです。マンガを描くようになったのは。

オカヤさんが美大を出たのは2003年。インターネットの時代が到来していたこともあり、オカヤさんは、WEBデザインの会社に就職する。

大学にいる頃から、知り合いの劇団でお手伝いをしていたらチラシをつくるようになっていたので、紙のデザインをやったことはありません。就職もまわりの人たちは広告代理店とかゲーム会社とか、しつかり就活していましたね。私はあんまり熱心に就活はしなかったんですが、小さなデザイン会社に入って、企業のWEBサイト制作の仕事をするようになりました。体育会系というか男社会でしたね。取り仕切っている代理店に真夜中に呼び出されて怒られたり。気合いが足りないと言われましたけど、気合いって何だろうって(笑)。

そのあと会社を辞めてフリーのデザイナーになりました。辞めた会社から仕事をもらったり、知り

合いから広報誌のデザインを頼まれたりして。ついでにイラストもちよこちよこ描くようになりました。



個人ブログがきっかけでデビュー
日常に根ざした
等身大の作品を世に出していく

そのままフリーのデザイナーとして生きていく道もあったと思われるが、個人でブログを書くことが一般的になった頃でもあり、オカヤさんはそこでマンガを描くようになっていった。

ブログにマンガを描いていて、こんな感じでいいんだったら個人で冊子にしてみようと思ひ、それをコミティアというマンガの即売会で売ってみたんですね。そしたらけっこう感触が良くて。当時、出版社がコミティアで作家をつかまえることが多くて、そ

ここで青田買いされました(笑)。マッグガーデンの編集さんで、割とオルタナティブ系のマンガが好きな人でした。その人にWEBでマンガを連載しませんがと言われたのが最初です。同人誌で描いていたのは短編だったので、そこに人物設定をちゃんとさせて同棲カップルの話にして1冊分描くことになりました。単行本を出すという前提で連載して、本に



いろいろちがい(エデンコミックス)
発行・マッグガーデン(2011・7・14)

なったときの印税を割って原稿料としてもらっていました。連載している間、描いたらお金がもらえるようになったので、「こんなので仕事になるんだ」と思いましたね。それが「いろいろちがい」という作品で2011年に単行本になりました。でもその頃はまだまだちゃんとマンガ家だと言えなかつた気がします。デザイナーもやってます、みたいな。

そう笑うオカヤさんだが、「いろいろちがい」のあと、少しずつ作品を書き続けていく。「いろいろちがい」がひと組のカップルの日常をスケッチしたような作品であったように、作者の分身と思われる人物の日々の食事や生活ぶりをさらりと描写した作品が多い。

自分が読む分には、壮大なファンタジーでもSFでも大好きなんですけど、自分で描くとなると、細

かいところに気がつくというか、小さなものを見て違和感をおぼえるものが描きやすいんですね。私、視野が広くないんです(笑)。

私は生まれも育ちも東京で、ずっと同じ地域に住んでいるんですね。だから地方から上京して美大に入った人の「東京で何者かになる」みたいな、ガッツがあまりない感じがします。東京に出て頑張ろうとする人たちのテンションにはかなわないんですね。私は最初から東京にいるし、とにかくここでどうにか生きていくしかないわけで。そう考えると自分の強みって何なのかなと思うと、日常とか身近なものに目が行くわけで。

2018年に芳文社から出た「いのまま」は、マイペースな主人公が仕事の合間にぼんやりしたり、食べ物をつくったりする内容。主人公の女性はかなりオカヤさん自身に近いようだ。

中学時代のエピソードが出てきますけど、あれはだいたい事実です。私は自炊と一人暮らしが趣味みたいなところがあって、どうも孤独感というものがあんまりないんですね。さみしいとか、誰かがいないと嫌だとか、そういう感じが希薄という。一人になると「やったあ、これで好きなことができる」って喜ぶタイプ(笑)。

でも、友達はいますし、人と会うのもお酒を飲むのも好きで、みんなでわいわい騒ぐのも嫌いじゃないです。何かに執着するのが嫌いなのかな。だから友達のプライベートなこととか全然知らなかったりするんです。

「いのまま」と同じ年に出た「みつば通り商店街にて」は、商店街で働いたり生活したりする人々が登場する群像劇だが、何気ない日常を追うのは変わらない。

ちよつとドタバタ劇みたいなものを書いてみたいというのがありました。探偵ものっぽい展開もありますけど、描いているうちにどんどん日常的になっていきましたね。ただ、自分はわりと冷静なタイプなので、「寺内貫太郎一家」みたいな人情物でハート



いのま (芳文社コミックス)
発行・芳文社 (2018・1・25)

フルなものにはならないというのはありました。このマンガは「モーニング」のWEB版で毎日更新だったので、20枚ぐらいまとめて描いてそれが更新されていくという、なんだか新聞の4コママンガみたいでしたね。商店街はいろんな年代の人が描けるので、老人を描くのが楽しかった記憶があります。



みつば通り商店街にて (チームコミックス)
発行・KADOKAWA (2018・10・12)



作家を主人公にした
「ものするひと」で新境地を築き、
次回作の構想を練る

日常の何気ない光景を描く作風がオカヤさんの真骨頂だが、加えて、文学をテーマにした作品も手がけている。2018年から19年にかけて「コミックビーム」で連載され、これまでの作品の中では最も長い作品が生まれた。それが「ものするひと」だ。

それを描く前に、「文学界」で「おあとがよろしいようで」というマンガを連載していたんです。作家さんたちに話を聞いて、それをレポートマンガ風にしていきました。描いているうちに、そういえばテレビやマンガに出てくる小説家のイメージって、昔の文豪からあまり変わっていないよね、と。いまだ

おあとがよろしいようで
発行・文藝春秋(2017・2・27)



に着流して平屋に住んでいるような、「サザエさん」に出てくる伊佐坂先生みたいな。そういうイメージで語られちゃいますけど、誰も着流し着てないって(笑)。それが「ものするひと」になったという。

飲み会の席で初めて会った「コミックビーム」の編集さんが、私のマンガを読んでいたでいたみ

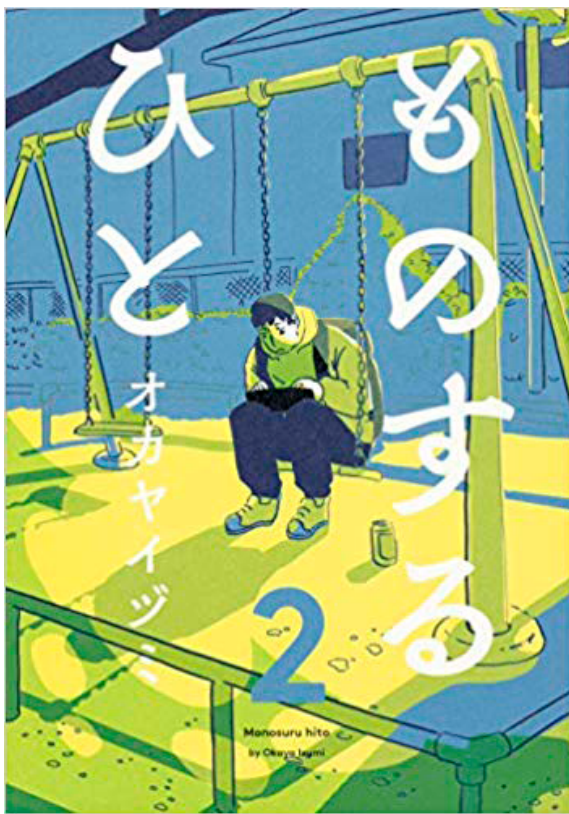
たいで、いきなり「長いもの描く気ありませんか」つて。それから数か月後には連載が始まっていたという。

文芸はいまそんなに売れるジャンルでもないんですけど、権威だけはすごくありますよね。受賞パーティが華やかだったり、打ち合わせをしても次の締



ものするひと1(ビームコミックス)
発行・KADOKAWA(2018・3・12)

め切りの話をしなかったりするらしいので、そういうのつて不思議だなあと。伝統芸能みたいな感じがありますよね。でも書いているのは現代に生きている人たちだし、書く小説にも今のことが反映されているのに、業界自体はすごく古めかしい。そこが面白いと思いました。



ものするひと2(ビームコミックス)
発行・KADOKAWA(2018・10・12)

「ものするひと」は、杉浦紺という30歳の小説家が主人公。小説だけでは食えず、警備のバイトをしながら執筆する様子が描かれている。

男性を主人公にしたのは初めてでした。というのも、男性のほうがぼーっとさせやすいんです。主人公はボロアパートに住んでいたりと、部屋が散らかっていたりするんですけど、もし女性を主人公にしたら、他に意味が出てきそうで。出ないと言え、主人公は感情もあまり出さくないです。というのも、人間ってそもそもマンガみたいに感情がはつきりしているわけではないですよ。誰かが感情的になるとみんなも同じ状態になる。泣いちやったら、みんな許すしかない、みたいな。そういう感じとは違う、少しもやもやした部分のほうが面白いと思うんです。

「ものするひと」の主人公は、小説を書いていて

も、酒を飲んでいても、そして恋愛をしても、ほとんど感情を表に出さない。

「ものするひと」の3巻で、主人公が最後のほうで少しだけ笑います。それを見ていた編集者が、「あ、初めて笑いましたね」と。ちよつとくすつという描写はありますが、人間は風景のなかの一部だという感じが好きなんです。

「ものするひと」は3巻で無事完結。好評をもって迎えられているが、次回作の構想が気になるところだ。

担当の編集さんとは、ゆつくり考えていきましよう、という感じです。いくつか企画はあるので、そろそろ動いていこうかなという。これまでにない舞台設定も考えたりしています。私はもう中年女性な

ので、そろそろそうした年代の女性のことも考えた作品もいかなと思っっています。最近はだいたい紙の本と一緒に電子でも出しますね。ただ、紙の本の売り上げで判断されてしまったりもしますね。

いまはイラストレーターさんたち4人ぐらいで借りているシェアオフィスで仕事をしています。夜



ものするひと3 (ビームコミックス)
発行・KADOKAWA (2018.6.12)

はちゃんと帰ってご飯食べて晩酌して寝る、みたいな(笑)。のっぴきならないときは夜中でも仕事しますけど、徹夜すると死んじゃいますから、しません(笑)。



インタビューは約2時間にわたっておこなわれたが、終始おだやかに、自身のマンガの登場人物のように語るオカヤさん。「ものするひと」の好評ぶりを聞くと、このままブレイクしていきそうな予感も大きいが、そうした状況になっても、地道に少しずつ自分の世界を広げて、新しいマンガを見せてくれるような気がしてならない。ともあれこれまでの作品を読み返ししながら、次回作を待つことしたい。

文・中島泰司

2019年5月10日

中野南口のカフェにて